

子どもの共生観の育成にみる統合保育の効果

静岡大学 ○関塚淑子 金田利子
湘北短期大学 井坂（斎藤）政子

【目的】 健常者の障害者に対する偏見や差別観を払拭するためには、幼少期から健常児が障害児と共に育ち、障害児の存在を受けとめていくことが必要なのではないかと考えた。そこで、統合保育における健常児の姿を観察すると共に、過去の統合保育経験者と統合保育未経験者の障害者観を問うことで、統合保育が後の障害者理解・共生観の育成に何らかの効果をもたらしていることを明らかにする。

【方法】 現在統合保育を受けている健常児に、障害児に対する意識調査を行い、健常児の障害児に対する実際に関わりを観察した。そして、現在の中・高生で過去の統合保育経験者と未経験者に障害者観を問うため、質問紙法による調査を行った。

【結果】 まず、在園児については健常児は常に障害児の存在を意識しており、障害児に対して必ずしも積極的な意識を持っていなくても比較的好意的に受けとめている子が多いことが明らかになった。そして、障害児とよく関わっている子ほど意識が高いことも明らかになった。また、統合保育を受けてきた者の「障害者との共生」についての意見は、統合保育の経験のない者に比べて非常に肯定的であり、かつ積極的であったことや、過去の障害児との共有経験が現在の障害児観に影響を与えているとする者もいたことは特筆すべきことであろう。しかし、統合保育未経験者でもその後の知識や経験によっては障害者に対して比較的連帯的な意識をもつことが可能であるということも明らかになった。

よって、本研究においては統合保育は子ども（健常児）の体験に基づいた共生観の育成に大きな効果をもたらしているということができよう。